発達上の問題のある少年院在院者の集団適応に関する研究

～発達上の問題の有無とソシオメトリックテストの結果との関連性に着目して～

○　宇治田　直樹　川田　聖展

（和泉学園）

KEY WORDS 矯正教育，発達障害，ソシオメトリックテスト，集団適応

１　研究の背景

Ａ少年院は，家庭裁判所で第１種少年院送致を受けたおおむね 14 歳から 18 歳までの少年を収容し，改善更生と円滑な社会復帰を目指して矯正教育を実施している。平成 26 年少年院法の改正時に，特殊教育課程以外にも発達障害等に焦点を当てたコースが設立されたが，他の少年院においても，医療機関で発達障害の診断を受けたり疑いが指摘されたりした者が在院している。矯正教育は，個別の問題性に応じつつ，社会復帰後の職場や学校等への円滑な適応を目的に，生活基盤は集団寮をベースにした集団指導を原則としている。発達障害を有する在院者に対する処遇の在り方等については，近年様々な視点から研究されているが，集団適応の状況に関する研究はあまりなされていないこともあり，本研究では発達上の問題の有無と集団適応の状況との間関連性に着目した。

なお，本研究のデータ使用についてはＡ少年院の承認を受けている。

２　研究方法

在院者の対人スキルや共感性を向上させるため，Ａ少年院では，集団内での役割活動を活用したり，集会指導で適切な助言方法の訓練を行ったりしているほか，SST などのプログラムも取り入れている。評価については，担任教官が実施する成績評価があるが，本研究では，集団適応の状況を測定するため，Ａ少年院で以前から実施してきたソシオメトリックテストのゲスフーテストの合計点（以下「ゲスフー値」という。）を採用した。

少年院の処遇は，３級から１級へ進級する３段階に分かれており，Ａ少年院では，３級時は新入時の寮で標準的には８週，中間の２級時は３つの集団寮に割り振られて２８週，１級時は出院準備の寮で１１週生活する。集団適応の状況を探る上で，中間の２級の集団寮でのゲスフー値の推移を取り上げた。対象は，改正少年院法が施行された平成 27 年６月１日から平成 29 年４月 30 日までの間に入院した 181 名のうち，移送された者や途中で寮を移った者，家庭裁判所から長期間の勧告（約２年以上）が付された者を除き，既に１級に進級した 90 名を母集団とした。さらに，入院前の段階で発達障害の確定診断や医療機関で疑い指摘され，特別な配慮を有していた者 11 名（ADHD 確定診断が 1，疑い 5，ASD 確定 1，疑い 4）を実験群，診断等がない者 79 名を統制群とした。

ゲスフーテストは，Hartshorne,H. らが提唱した性格，行動，態度等の評定法で，指定された特性を持つあるいは持たない人名を評定者が特定する。第三者の目からではなく構成員相互の評価による点が特徴で，本研究では，集団適応が進むにつれ数値が高くなると仮定する。Ａ少年院では，約 20 名の集団を対象に１か月に１回実施し，「責任感」「状況判断」「協調性」「忍耐力」「内省力」「善悪の判断」「積極性」「生活設計」の８項目について，プラスとマイナスの評価をそれぞれ３人ずつ選ぶ形をとっている。集計結果は，「+20」や「-15」などと数値化される。

本研究では，発達上の問題とゲスフー値に何らかの関連性があると考え，以下の仮説を立てた。

仮説①　実験群は，寮編入時の適応につまずきを生じるため，統制群よりゲスフー値が低くなる。

仮説②　実験群も，教育効果により集団適応が進み，統制群同様ゲスフー値が徐々に高くなる。

仮説②　ただし，実験群は，全教育期間を通して統制群と比べてゲスフー値が低い。

３　結果

（１）ゲスフーテスト結果との関連性

ゲスフー値の高低については，プラスかマイナスかを目安として，発達上の問題の有無との関連を検定した。

表１　発達障害の有無とゲスフー値との関連に関する検定結果

χ^2検定（p＜0.01）

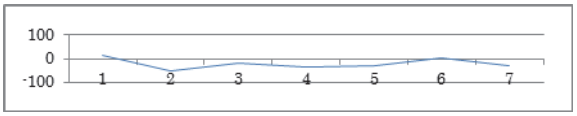
		発達障害有無			χ^2検定
		あり	なし	計	P値
仮説①2級集団寮編入初回時	プラス	1	18	19	0.297
	マイナス	10	61	71	
仮説②2級集団寮最終時	プラス	2	62	64	0.00036
	マイナス	9	17	26	
仮説③2級集団寮期間平均	プラス	2	50	52	0.0045
	マイナス	9	29	38	
		11	79	90	

仮説①に関して，２級集団寮編入初回時のゲスフー値をプラスかマイナスかで集計し，検定を行ったところ有意差は認められなかった。つまり，編入当初は他からの評価は発達上の問題の有無にかかわらず低いという結果となった。仮説②に関しては，２級の集団寮で集団生活を送り，１級の寮に移る直前の値は，発達上の問題がある在院者が有意に低い結果となった。仮説③については，２級集団寮在籍期間の平均の差についても仮説②同様発達上の問題がある在院者が有意に低い結果となった。

（２）ケース検討

発達障害が疑われた少年２名について，数値が向上した者と，低迷した者処遇の経過等について考察する

(例)ケースＢ　ADHD　教育期間全期間低迷型の推移



４　結語

発達上の問題と集団適応との関連について，従来から行っていたソシオメトリックテストの結果を用い，発達上の問題を有する在院者と集団適応との間に関連があるとの結果が得られた。少年院の矯正教育は，院内の集団生活で完結するものでなく，円滑に社会に復帰させることができるかがポイントとなり，職場などの集団への適応に関するリスクの高さが懸念される。ただし，ケース検討で，院内で何らかの成功体験を持った者でゲスフー値が上昇した者もいたこともあり，対人スキルの向上を目指した指導を充実させることに並行して，いかにして対象者の自己効力感を高めるかが課題になると考える。（UJITA Naoki，KAWADA　Kiyohiro）